

月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊平成元年 創刊 28 年目
創刊 1989 年 Nr. 322

2016年4月号



Hoftafel anlässlich der Verlobung der Erzherzogin Marie Christine mit Prinz Albert von Sachsen 1766 Johann Carl Auerbach 1773 Leinwand © KHM-Museumsverband

ヨハン・カール・アウアーバッハ 「1766年 大公女マリー・クリスティーネとザクセン王子アルベルトの婚約に際して 宮廷の饗宴」 1773年 カンヴァス 美術史博物館所蔵

美術史博物館 創立 125 周年記念特別展「祭を祝う」Feste Feiern. 125 Jahre - Jubiläumsausstellung にて 2016年9月11日まで展示

杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 55



私事で恐縮であるが、三月十七日に最終講義が開催されたので報告したい。京大には平成三年七月に赴任したので、在職はわずか四年九ヶ月。このような短い教員生活では普通、最終講義は行わない。学生時代を含めて四七年間も京大におられた先生でも最終講義を遠慮される方さえいる。同じ専攻に二十数年も勤められた伊藤教授が同時に定年退職を迎えたため、私もついだに最終講義を行うこととなった。神野専攻長らのご厚意により、晴れの舞台に立つことが出来て幸運であった。本エッセイの読者に案内したこともあり、木村、小林両名

普教授を含む大学関係者や学生ばかりでなく、関東から数名、親戚数名、日本画仲間数名、ソフトボール仲間一名、作家で日本原子力研究所(原研)同期の高嶋哲夫君、大学同期一名、札幌南高同期二名を含む一〇七名が午後時半、京大桂キャンパスC3棟第3講義室に集まって頂いた。



攻に移籍して原子炉安全研究や教育に従事、原子炉安全工学の専門家として、三大シビアアクシデント(スリーマイル島、チェルノブイリ、福島)に遭遇したと云ふほど、主な活動の概要を述べた。後半はこれからの原子力の必要性、安全性について概説した。最後に学生・若手贈る言葉として、大きな目標を掲げる、自分の頭で創意工夫する、一歩一歩努力して確実な成果を得る、内外に豊富な人的ネットワークを築く、会議等では積極的に発言することを強調した。九十分の持ち時間超過によりソフトボールの話を一部割愛したのには残念だったが、一般の方々にも分かり易いことを心がけたためか、時々笑いもあり、評判も良かったので満足だった。お集まり下さった方々には心から感謝したい。

さて、今月のウィーンと京都の対比では両市を開いた壁について述べてみたい。中世以来、ウィーンの周囲には堅牢な城壁が張り巡らされていた。この城壁は、一回にわたるオスマントルコによる包囲をはじめる、諸外国からの攻撃から街を守つてきた。しかし、その後一世紀の間にウィーンの人口は増加し、城壁は街の発展の阻害となつていった。そこで一八五七年、皇帝フランツ・ヨーゼフは、この壁を取り壊し、その跡に幅五七メートル、全長五三キロの環状道路の建設を決めた。環状道路沿いには、ウィーン大学、市庁舎、国会議事堂、美術史美術館、国立オペラ劇場、楽友協会などが次々に建設された。ウィーン大学の向かいの小広場にウィーン市長としてオスマントルコによるウィーン包囲から街を守つたこ

とを記念した像がある。像の後ろの高台にはウィーン市壁の跡がある。

一方、京都の御土居(おどじ)は天下統一を成し遂げた豊臣秀吉が、長い戦乱で荒れ果てた京都の都市改造の二環として、外敵の来襲に備える防塁と鴨川の氾濫から市街を守る堤防として二五九二年に築いた。台形の土塁を堀からなり、延長は三・五キロ、東は鴨川、北は鷹峯、西は紙倉川、南は九条周辺に沿って築かれた。土塁の内側を洛中、外側を洛外と呼び、要所には鞍馬口など七口を設け洛外との出入口とした。江戸時代に次第に無用の存在となり、一部を除いて次々と取り壊された。市内に残る御土居のうち重要な遺構として、昭和五年に八箇所、昭和四〇年に追加箇所の計九箇所が史跡に指定されている。両市の市壁の経過がよく似ている。

余談であるが、筆者はウィーン市壁も御土居の名残も見ることがある。両市のかつての壁を紹介できた幸運に感謝しつつ、環状道路に面する美術史美術館のスケッチを掲載させていた。

■杉本純 前京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■